

「方法」講義立会記

匿名希望

今回は美術家・中ザワヒデキが立教大学で行っている「表象文化」の講義の立会人として彼の美術スタイルである「方法」について三つの点に分けて記したいと思う。なお、私の美術的な知識・見解は全くの素人ものである。

まず始めにその活動は2000年1月1日から2004年12月31日までの5年間であり、その活動は主に宣言の発表と機関誌の発行であった。メンバーは最初の2年間で中ザワヒデキ、詩人松井茂、音楽家足立智美、次の3年間で中ザワ、松井、作曲家三輪眞弘であった。

では次に彼の言う「方法」とはなんだろうか。これは私が彼の講義に立ち会う際、一番初めに抱いた疑問である。方法主義Q&Aにてみられる彼の方法に対する見解を私なりにまとめてみると、次の4つの点があげられる。

- ① 個性は要求されない。なぜなら方法は普遍であるべきだから。
- ② 形式美、アルゴリズムの美とも関係ない。
- ③ 意図はない。
- ④ 「次」はない。

この点を踏まえ、改めて「方法」とは何だと問われたのなら「方法」とは「方法」であるとしか言いようがないように思われる。そしてその全ては③の“意図はない”に由来し、だからこそ「方法」は普遍であることができるのだと考えたが、少なくとも活動としての「方法」を行う場合本当に意図がないなどという状態は可能なのだろうかという疑問が浮かんだ。しかし、この疑問を突き詰めると極めて哲学的な問題になってくるので詳しくは省略する。

最後に中ザワあるいは「方法」の活動に多く見られるのが、自らを肯定すると同時に否定するというパターンである。これは中ザワ本人も気に入っているのか、講義中このような部分が出てきたとき「ここは笑うところですよ」と言って示している。(しかし実際に立会人からの笑い声上がることは少ない。)話しは戻るが、このように肯定・否定どちらの意見も併せ持つというのは、自らが極めて中立的な立場に立つことができるということの表れであり上記の四つの点に通じるところがあるように思われる。

ここまで考えてみると一見複雑に見える中にも一貫性が見え隠れし、「方法」がより親しみやすいものとなってきたのではないだろうか。さらに奥深い内容を探るため、引き続き中ザワの立会人として講義を受けようと思っている。